

幼児期における 言語障害児の導き方

田口恒夫

といえ、それが自分と他人の間柄を保つために、つまり適応の道具として、使われる重要な道具だからである。

しかし、ことが言語障害の問題となると、多くの人々は全く他人事のように無関心でありがちである。ひとつの理由は、言語障害者が全体の5%に充たず、九五%以上の人々は普通の状態において、普通に話すことに何ら苦労してはいないからである。

ところで、私もが現在無意識に行なっているこの「日本語を話す」ということが、実際は非常にむずかしいことであって、たとえば「お茶の水女子大学」などという発音を、私もが笨々とやっているとこのことは、たとえば外国人などにとっては驚異的なののである。人間の行動には呼吸などのように無意識のものが少なくないが、ことばもそうである。そのことばがうまく話せないという状態は、普通の人にはなかなか理解しにくいことであるが、不自由な語学力で外国生活してみると、その困難さがよくわかるものである。外国生活をしているのと同じ困難さを、わが国に生活しながら感じている人が少なからず存在するのだと考えてみるとよいかもしれない。

話しことばの問題は、最近よく話題にされるようになってきた。幼稚園教育要領での扱われ方をみても、小学校における「話し方」「聞き方」の学習指導にも、戦後社会で話しことばの比重が大になつてきている傾向が、はっきりと現われている。成人のための「話し方教室」の繁盛もその例といえよう。「話す」ことが、なぜ重要か

ことばの問題の中で「読むこと」「書くこと」は小学校以上の教育にゆだねられているが、その基礎となる話しことばが完成されていないと学校教育にも支障をきたす。わが国では話しことばの研究はまだ余り発達していないが、外国ではスピーチサイエンスという分野が確立されており、少なくとも次のことがらは基本的事実として確認されている。

①話しことばは、生まれつき身につけているものではない。人に教えられ、習っておぼえることによって身につくものである。狼少年や、耳の聞こえない者が啞になるという事実はこの例である。これらは、学習に必要な条件を剥脱しておいて、学習効果が皆無であることを証明したことになる。

②話しことばは無意識にしゃべるものである。しゃべる動作ほど、連続的で、速くて、しかも正確なものはない。極めて高度の運動機能であるにもかかわらず、本人はこれを知らぬ間に行なっている。意識して、計画的に順番通りやれといわれると、かえってやれなくなってしまう性質がある。無意識に行なわれるのが自然な状態なのである。

③ことばを話すための専用の器官が人間には一つもない。舌も食物を飲みこむためのものであり、唇も食物の入口を閉じるための器官である。つまり、各々に独自の生命保持の機能を持っている器官を借りてことばを話しているのであって、その証拠には、生命保持の必要上に呼吸や食物をとることが必要な場合には、ことばを話す余裕がなくなってしまう。

④話しことばは社会生活上欠くべからざる道具である。例えば、言語障害者の収入は平均一〇%低いというようなことがいわれるが、話しことばのハンディキャップは、社会生活上のハンディキャップを生む。

以上序論として、話しことばの性格について大要を説明してみた。次に言語障害の問題を考えてみよう。

◆幼児期における言語障害の問題

ことばが年令なみにうまく話せない子どもは全て言語障害とよばれるのであるが、その原因は実に多様である。そこで現象的にとらえて、次の三つを考えてみることにしよう。

すなわち、①ことばの発達がおくれている。②一般的にはよく話すがある種の発音が正しくできない。③どもり

まず最初の二つを考えてみよう。ことばの発達がおくれているということは、ことばの学習がおくれた状態、または、順調でないはずんだ発達をしている状態ということである。その中で発音の面にとくにひずみのある場合が、先に挙げた②のタイプである。

ことばの学習は、誕生と同時に始まる。六、七才頃までの間に、非常に勢いで行なわれるものである。従って、子どもの言語障害は、全てこの時期に発生する。

言語障害の子どもに対しては、正常を欠く原因をまず確かめなければ、障害に対する判断ができないわけであるが、よく知られ確認されているものとしては、次のものがあげられる。

①知能がひどくおくれている場合。知能のおくれがあれば、学習が障害される。言語学習は先にも言ったように激しい学習であるから、知能のおくれは当然ことばのおくれをひき起こす。しかし、知能のおくれが言語のおくれとどう結びつくかということは正確にはわかっていない。わずかに、統計的に、知能のおくれがひどい人ほどことばのおくれの程度がひどいということがわかっているだけで

ある。知能のおくれに比してより以上にことばがおくれる場合は、知能だけでは説明できない。

② 耳の聞こえが悪い場合。

③ 運動まひのある場合。話すために使う器官の運動がうまくいかない場合は、当然、話すこともうまくいかない。精薄児には、この点で異常をもった子どもが多く、食事がうまくできない子どもが非常に多い。

右に挙げたことがらは、その子どもの側の問題である。子どもの言語障害を訴えられると、その子どもだけを問題にし、調べようとしがちであるが、ことばの学習指導した人の側をもっと問題にすべきである。私も自身の外国語学習の場合を考えてみても、問題は教師や教え方にある場合が多いのである。子ども以外の条件を考えてみる必要がある。それは、環境的な条件である。

④ 環境的な条件。これに関して研究が殆んど進んでいない。教え方がまずいと子どもの言語学習はうまくいかないわけであるが、普通の母親は学習指導法などよく知らないままに、じっさいには大部分の場合すばらしい方法でことばを教えている。これを分析してみると、次のような要素が浮かび上ってくる。

イ、母親は、赤ちゃんによく話しかける。赤ちゃんにとって最初は、ことばは単なる雑音として受けとられる。全く日本語を理解せず、耳もよく聞こえない赤ちゃんに、母親は絶え間なく話しかける。そして、八か月近くになってようやくその日本語の一部を理解し始めたらしいが現われるのである。一体、どのくらいことばを聞かせ

たら理解できるようになるかということについての研究はまだほとんどないが、とにかく母親は、毎日、うますたゆまず、ことばの刺激を入れてやっているのである。これが最も大切な条件である。

ロ、赤ちゃんが声を出すと、それに対して母親は必ず反応し、それをあげましてやる。しかも、それが殆んど快の反応である。

赤ちゃんは普通、声を出すことを強制されはしないし、何を言っても叱られない。更に、母親は、子どもが幼いほど真正面の近い距離からきわめて印象的に話しかける。距離が近ければ声が距離の割に大きく聞こえるものであるが、母親はボリュームを落とさず、大きな声のまま話している。従って、子どもの耳には、大きな声が常に聞こえている。しかも、母親と子どもの関係は一对一であるし、子どもは母親を信頼して受けいれる関係にある。

以上のような教育、つまり普通の母親が普通にやっているようなこと以外に、ことばを話させるよりよい教育方法はない。語学教師のやっている方法が成功しないのと考え合わせるとよいであろう。これらの条件に欠けていた場合、ことばの発達はおくれ、障害が起こりやすいわけである。

次に、自閉症・緘黙症（緘黙）などのような情緒的な問題や、小児分裂病、更に、失語症などの原因でことばの障害が現われることもある。

要するに、子どもが発音をおぼえるという状態では最初の数年、とくに最初の一・二年間が最も大切なのであるが、子どもの頭の中でのどのような学習が行なわれているのかについては、まだくわしく

わかっていない。その学習の結果として外に現われ出てきたもの、つまり、語い数とか、品詞の発達とかの研究だけが、わずかになされている状態である。

発音は、マ・バ・パ・ワなどの唇音とよばれるものが比較的早く、カ行の音は平均して満二才、サ行の音などはずっとおとされて、平均四・五才などというように、音によって発達段階があつて、米國などではこれの研究が殆んど完成されている。例えば、サ行（Sに母音のつく音）などは女児では半数が六才で完全になり、男児は更におくれるということが明確化されている。わが国では、まだこれからである。

幼稚園年令の子どもは、ちょうど発達の途上にあるので、そのまま放つておいてもよい場合もあるが、逆の場合、つまり、この時期に放つておくと一生、自然には直らない場合もある。最近では診断法が発達していて、二・三才児からそのような診断や予後の判断が可能であり、放つておいてもよいものか否かの診断ができるようになってきている。

◆発音異常児の扱い

ここで、発音異常児に関する学令に到達するまでの扱いを考えておこう。

①まず、ことばの学習を困難にしている要因はなにか、そのなかで治療困難な学習障害の有無を確かめ、医学的治療や心理学的治療によって除去するものはないかどうか、を検討する。

②発音のできない音の種類を検討する。音の発達順序に従つて調べていくと、ある順位以降の音が全て発音できない場合と、ある特定の音をとびこえて他の音は発音できている場合とが見い出される。

前者は、何かの原因で、ある段階で発音の発達が足ぶみしてゐるのであつて、条件さえよければ、これから徐々に発達していくであろうというみかたも出来る。しかし厄介なのは後者である。これは、ある段階で、ある音を学習する際に誤つた学習が行なわれてしまい、それが固定してしまつてゐるのであつて、放置するとひとりでは直らないおそれがある。

発音障害の原因で最も多いのは、その音の学習期に「あつた」なんらかの異常であるが、現在のその子どもの状態からでは、すでにそれがわからない場合が多い。たとえば、満二才前後に学習するはずのカ行の音の異常が、その学習期に数週間にわたつて風邪を引いてしまい、「カ」の発音ができにくかつたため、それに似た音の発音のしかたをおぼえてしまい、それが固着してしまつた結果であるというような場合がある。これなどは成長後の子どもの状態からはわかりようがないわけである。

発音学習期の異常としては、次のようなものが考えられる。

①その時期に、口内炎・がこうそうなどがあつて、口の中にその音の発音動作をする痛みがあつた場合。または口蓋などの一時的な麻痺があつた場合。

②学習指導者、主として母親やきょうだいの発音が異常だつた場合。

②その当時、耳の聞こえが悪かった場合。などであるが、その当時の異常が、現在までひき続いている場合にだけ原因がはっきりするのであって、現在では不明の場合が多いのは当然といえよう。

発音障害をもつ子どもの中で目立った特徴をもっているもののひとつが口蓋裂の子どもであるので、口蓋裂について述べてみよう。

(1)口蓋裂について

口蓋裂児は一〇〇〇人に一人の割合で誕生している。これが外側に現われて唇が割れている場合を兔唇とよぶ。これは胎生四週間目から七週間に形成される組織の接合がうまくいかなかったために起こるものである。

口蓋裂、特に兔唇を伴った子どもが生まれると母親はそのショックから母乳の分泌が悪くなり、乳児の方も吸う力が弱くなるために哺乳困難となり、発音障害を起こしやすく、弱く病気がちな子どもになりやすい。病気の子どもは全般的に発達がおくれがちであるし、あやされる機会に乏しく、ことばの刺激も受けにくいというような悪循環が生じる場合が多い。しかも、そのまましていると、ことばの学習期に口と鼻がつながった状態のままであるため、異常な発音のしかたを学習してしまうのである。口蓋裂のために、普通の発音をしているのにいきが鼻にぬけておかしくなるのではない。その子どもは乳幼児期に口蓋裂という状態のまま発音の学習をしなければならなかったために、異常な発音を学習してしまうのである。従って、六才頃手術をして口蓋裂を直しても、発音は依然としてよくなるらない。それは、学習した音が固着してしまっているからで、

医学的な構造の改変だけでは、ことばのほうはどうにもならないのである。

現状では、六才くらいで手術する人が多いが、生後すぐに発見し、満一年以内で手術することが望ましい。満一年以内に手術してしまえば、それ以後、発音の学習期を正常な口蓋を使ってすごすことができるからである。そうすれば六〇%以上の子どもが、ひとりで正常な発音を学習して、ことがわかつていく。

六才頃に手術した場合は、発音のやり方の再学習が必要である。再学習が正しく行なわれれば、だいたい一年から三年くらいで正常になる。そのためには、言語治療教室がもっと普及する必要がある。幼稚園年令児に対しても、予防指導が行なわれることが望ましい。精薄児のための特別保育と同じく、言語障害児にも特別なカリキュラムが組まれ、適切な指導が行なわれる必要がある。

口蓋裂の子どもに対する対策としては、まず生後できるだけ早く発見し、早く手術をして、条件を整えてから学習させること、及び、学習後に手術したら、再学習をきちんと行なうことがたいせつである。

(2)難聴児について

難聴児には発音異常が多い。人間の耳は、ピアノのキイの一番低い音よりさらに低い音(約二〇サイクル)から、一番高い音より以上に高い音(約二〇〇〇〇サイクル)までを聞くことができる。ところで、聴力障害者というのは、必ずしも全部の音がボーンと聞こえにくくなるのではなく、ある音は比較的よく聞こえるのにある音

はいくら大きくとも全然聞こえない、というような場合もある。人間の話すことばは、大体においてピアノのキイの真中の音より高い音でできており、特にマサツ音などの子音は主としてピアノの一番右の音よりさらに右よりの高さの音でできている。これが聞こえないければ話されることばが全然つかめないことになるし、厄介なこと自分に自身もその聴力異常に気づかないことが多い。

難聴児は、話されることばが不明でわからないままに、態度その他で適当に反応し行動している。従って他人も気づきにくいものである。例えば、大人が「○○ちゃん、ここで待ってね」とやさしく言うとする。子どもは、大人がにっこり笑うので、にっこり笑って反応する。大人は理解したものと思つて、子どもをその場においておくが、子供はあきてよそへ行つてしまふ。この場合、「この子はちっとも約束を守らない」と大人が叱りつけるとすれば、その子にとつて、さっきまでにこにこしていた大人が急にしかりつけるといふわけで、大人に対する不信の念を生じさせるものとなりやすいのである。聴力障害児が性格異常や行動異常を起こしやすいのは当然であろう。

難聴を早く発見すること、これが何よりも大切である。そして、難聴児にふさわしい教育をすることである。つまり五〇〜六〇デシベル前後の聴力の者を六才まで放つておくと、ろう学校へ入れる以外に途がなくなるし、ろう啞者としてしか生活し得なくなる。ところがその同じ子どもを、満三か月〜六か月、おそくとも九か月までに発見し、聴力の不足分を性能のよい補聴器で補い、定期的に専門

家が指導を行なえば、いまでは補聴器をつけた正常人として生活できるようになる可能性があるのである。

英国では、難聴児対策が充実していて、九か月までに発見し、公費で補聴器を与え、パートで専門家を家庭に派遣し、適切な指導を行なうような制度がここ一〇年以來実施されている。これによつて、難聴児の可能性がぐつと拡がっているのである。

六才以後の発見ではおそく、ろう学校でいかに熱心な教育を施しても、なかなか正常な日本語をしゃべることは期待し得ない。わが国でも、早急に難聴児の早期発見、早期教育対策をこうじるべきである。

(3) どもりについて

幼稚園で数多く発見される言語障害のひとつにどもりがある。

どもりの原因は、はっきりせず、原因と言われているものにも確認のないものが多い。例えば、遺伝説もどもりの子どもの家系調査をするとどもりの人が多く出てくるが、これは味噌汁の好きな人の家系の子どもは味噌汁が好きな場合が多いけれども、味噌汁好きが遺伝したとは言い得ないように、遺伝とは言い切れないものがある。

模倣説も不確かである。どもりの発生は八割以上が三才前後であるが、成人後のインタビューでは、本人が三才頃の状態を記憶せず、小学校四年以降の模倣をあげる場合が多く、至つてあいまいである。

原因に関しては不確かことが多いが、はっきりしているのは次のいくつかの事柄である。

①どもりの発生は三才前後が多い。

②女兒よりも男児に多い。

③人種・国籍を問わず、およそ一〇〇人に一人の割合にいる。

④気にすればするほどひどくなる。

以上は、はっきりしていることであるが、どもりに関する他の意見は、全てまだ不確かの出ないのである。

ノイローゼ説・左きき説も同様である。左きき説も以前には宣伝されたが、その神経学的には根拠が薄いし、研究方法が精密化するにつれてはつきりしなくなってきた。ただ、左ききの矯正をしようとする親が、食事とか字を書くとかいう特定の場合だけを問題にしがちであるし、無意識に自然に子どもが行なっている動作について口やかましく注意することになるので、それが子どもを欲求不満状態に追いこみやすく、それがひいては、どもりを発生しやすくなるのではないかと考えられている。

男児に多いのは、社会的な役割の与えられ方に原因があり、男児の方が女兒よりも行動の許容範囲がせまいため、不安定と緊張を紹くのではないかとわれている。つまり、男児は、幼時から男らしく行動することを要求されて、女々しい弱々しい行動を許されないが、かといつて過度の攻撃性はやはり禁止される。女兒は、女々しく弱々しい方は比較的境界なしに認められ、攻撃的・積極的な活動面の自由さは男児と余り変わらない。その意味で男児の活動の許容範囲は女兒よりはるかにせまいわけである。しかしこの研究も、かんじんの「それならばなぜ男児がそういう条件下で、爪噛みや夜尿症

でなく、どもりを起こしたのか」という原因を明らかにしてはいない。これに反してどもり発生の条件や推移・経過は、徐々に判明してきている。

米国の研究では、どもりの発生しやすい三才前後の子どもに關して、次のようなことがいわれている。即ち三才前後の子どもは、一般的によくどもるものである。その中の一部の子どもが、そのままどもりの状態を続けるのである。それを子ども自身は殆んど気にせず、不適応は少ないのであるが、この時期にどもってうまくしゃべれない経験を重ねているうちに、大人が心配して、それを直そうとし、かえってことばそのものを意識させ、子どもを緊張させ、ますますどもらせるといふ悪循環が生じやすいためである。そして、小学校三年くらいまでそれをくり返したあげく、ついに子ども自身の中にどもりを恐れ、固くなりなるとかそれから逃れたいという気持ちが生じ、そのためにかえってそのトリコになってしまうという時が来るのである。

扱ひ方としては、先ず、あせらず、成長と成熟によって正常になることを期待して、待つてやることである。子どもがどもりながら何かを伝えようとしている時は、そのしゃべり方を問題とせずその内容を聞いてやり、内容に対する反応をきちんとやることが大切である。どもること自体よりも、恐しいのはむしろどもることに對する周囲の反応である。両親がその点をよく理解し、決しこどもであることを気にせず、その子どもを普通に扱ってやるのが大切なのである。

(お茶の水女子大学)